

糖尿病性結節性病変の亜型とその形成機序

著者	内藤 毅郎
雑誌名	博士学位論文要旨 論文内容の要旨および論文審査結果の要旨 / 金沢大学大学院医学研究科
巻	平成2年7月
ページ	4
発行年	1990-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/14755

学位授与番号	医博甲第 909 号
学位授与年月日	平成元年 6 月 7 日
氏名	内藤 毅郎
学位論文題目	糖尿病性結節性病変の亜型とその形成機序

論文審査委員	主査	服部	信
	副査	竹田	亮祐
		松田	保

内容の要旨および審査の結果の要旨

糖尿病性結節性病変の形成機序に関しては、いまだ一定の見解がえられていない。本研究では糖尿病性腎症の病理組織像を詳細に検討することにより、結節性病変の亜型分類を試みるとともに、免疫蛍光抗体法により、おのおのの亜型における膠原線維の同定を試みた。

研究方法：1 次性糖尿病患者 348 例よりえられた腎組織のうち、結節性病変が認められた 63 標本について、光顕および電顕観察を実施し、くわえて免疫蛍光抗体法により IV 型および VI 型膠原線維の分布を同定した。なお、本研究では、係蹄末梢部に小葉中心性にみられるエオジン好性、PAS 染色陽性物質よりなる類円形構造物を結節性病変と規定した。

研究成績：結節性病変には、病理組織学的に異なる 2 型が観察された。一つは、PAM 染色に濃染する物質が不規則な網状構造を示すものであり、これを I 型結節とした。網状構造に一致して、IV 型および VI 型膠原線維が検出された。一方、II 型結節とした他の一つは、PAM 淡染性を示す類同心円層状構造物を主要構成成分とし、蛍光抗体法では IV 型線維の蛍光は微弱であった。観察された結節の亜型に基づき、63 症例を、I 型結節のみが認められた 23 例（I 型結節群）と、II 型結節が認められた 40 例（II 型結節群）との 2 群に分けた。全例に II 度以上のび漫性病変が認められたが、2 群間でその程度に差はなかった。細動脈硬化症については、II 型結節群は全例が II 度以上の病変を有しており、I 型結節群に比べ高度であった ($p < 0.05$)。また、び漫性病変が IV 度と高度で、細動脈硬化症が I 度と軽度であった 3 例は、いずれも I 型結節群に属し、逆にび漫性病変が II 度と比較的軽度で、細動脈硬化症が III 度と高度であった 3 例は、II 型結節群に属していた。なお、mesangiolysis および微小血管瘤は、II 型結節群ではそれぞれ 100%、80% に、I 型結節群では 43.5%、0% に認められ、II 型結節群で高頻度であった ($p < 0.01$)。

まとめ：結節性病変には、び漫性病変の進展により形成されるものと、mesangiolysis を介した係蹄の再構築過程において形成されるものとの、相異なる 2 型のあることが判明した。また形成される結節性病変の亜型を規定する因子として細動脈硬化症の関与の大きいことが示唆された。この成績は、糖尿病性腎症の原因および治療法を考えていく上で、極めて示唆に富むものであり、腎臓病学に資するところが大きいものと考えられた。